

研究ノート

社会学的エッセイ (その3)
——社会学を通して生き方を考える——

片 桐 新 自

Sociological Essays (3):
Thinking about the way of life through sociology

Shinji KATAGIRI

Abstract

Sociology is the study that can analyze total society, connect various problems with total society, predict the near future society, and propose policy from a macroscopic point of view. But it is also useful for the private life of people. It is not too much to say that life is an endless role-taking process. A person who can exactly understand the roles expected for certain status in the present society, can decrease the number of mistakes on selection of action and make their life happier. In this paper, I propose a better way of life through sociological thinking.

Keyword: sociological thinking, way of life, role-taking process

抄 録

社会学は、マクロな視野に立って、全体社会そのものを分析したり、様々な諸問題を全体社会との関連で位置づけ、近未来社会を予測し、政策提言をすることのできる学問だが、個々の人々の生活にとっても有用な学問である。人の人生は、絶え間なき役割取得過程にあると言っても過言ではないので、現代社会ではどのような地位にどのような役割が期待されているかを正確に把握ができれば、行動選択のミスは減り、生活をより充実させることができる。本稿では、社会学的思考を使ってよりよく生きるための提案を試みる。

キーワード：社会学的思考、生き方、役割取得過程

〈目次〉

はじめに

- 第1章 半分「個」・半分「類」として生きてみたら (1997. 6. 10)
- 第2章 欲望のままに生きていては…… (1999. 8. 8)
- 第3章 「小恋愛結婚」のすすめ (1999. 9. 21)
- 第4章 頭のギア・心のギア (2000. 4. 23)
- 第5章 良きフォロワーから失敗を恐れぬリーダーへ (2000. 6. 24)
- 第6章 走り出す3回生たち (2000.10.28)
- 第7章 顔を上げて (2000.11. 8)
- 第8章 戦後史を学ぼう！ (2001. 1. 12)
- 第9章 子供は親のおもちゃじゃない！ (2001. 1. 18)
- 第10章 ほちほち行くか、頑張るか (2001. 1. 21)
- 第11章 引きこもりと甘え (2001. 2. 17)
- 第12章 活己為公 (2001. 4. 27)
- 第13章 ちゃんと子供を注意して！ (2001. 4. 27)
- 第14章 「愛」と「恋」 (2001. 5. 18)
- 第15章 3分の1の幸せ (2001. 7. 20)
- 第16章 ドタキャンのコスト (2001. 8. 10)
- 第17章 賢さとは？ (2002. 1. 19)
- 第18章 人生の先達の役割 (2002. 4. 11)
- 第19章 恋をしようよ、男の子！ (2002. 7. 10)

おわりに

はじめに

これまでに、社会学的な見方に立ったエッセイとして、「社会学的エッセイ——時代診断と政策提言に向けての素描集——」（『関西大学社会学部紀要』第34巻第1号、257-283頁、2002年）と、「社会学的エッセイ（その2）——身近な問題と社会をつなぐ——」（『関西大学社会学部紀要』第38巻第1号、137-157頁、2006年）を本誌に発表してきました。両方とも自分のWEBサイト（<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/>）で公開したもののなかから、主として社会全体や社会制度に関して述べた文章を選んで、発表したものです。社会学の第1の役に立ち方とは、こうしたマクロな社会に対する分析と政策提言にあると思っていますが、的確な社会状況分析ができれば、その中で個人がどう行動すべきかに関しても適切に判断ができ、より充実した生き方もできると思っています。それが、社会学の第2の役に立ち方です。そこで、本稿では、これまでWEBサイトに発表してきたものの中から、社会学的な見方を活かして生き方を考えた文章を抽出しました。こうした内容の文章をかなりたくさん書いてきたので、今回は1997年から2002年までの間に公開してきた

文章の中から選びました。その後書いたものも近いうちに発表したいと思います。

通常の学術論文と違い、学者・研究者と呼ばれる人たちより、学生や一般の方々にも読んでもらえるものを、と思っていますので、文体はソフトな「です・ます」調で書いています。こうした一般の人が受け入れやすい形式の文章こそ、社会学という学問を理解してもらうためには大事なことだと考えています。各章タイトルの後に入れてある日付が、サイト上で公開した日を示しています¹⁾。一応、公開順に並べておきましたが、個々の章は独立していますので、興味をもった章から読んでいただいて構いません。

第1章 半分「個」・半分「類」として生きてみたら（1997.6.10）

最近、学生たちと話していると、「男らしくとか、女らしくではなく、自分らしく生きたい」という発言によく出会います。おおいに結構なことです。しかし、さらにしばらく話を続けていると、こんな発言が出はじめます。「自分らしく生きるって、具体的にはどんな風に生きたらいいのだろう?」「自分に合った生き方がどんな生き方かよくわからない。」こうした悩みは、かなり広く若者の間に共有されているのではないのでしょうか。そこで、「自分探し」がはじまります。ある者は宗教に心酔することによって、ある者はボランティア活動に一所懸命になることによって、またある者はブランド品で身を固めることによって、何者かたらんと求めています。表面的な現れ方は様々ですが、いずれも「自分らしく生きたい」という動機がベースにあると言えるのではないのでしょうか。

若者を導く確固とした価値観の消え失せた現代社会は、ある意味ではとても生きにくい社会なのかもしれません。かつてほどには「こういう風に生きなさい」と社会は生き方を押しつけてきません。親が多少生き方を強制しても、ちょっと社会に目を向ければ、親の正統性を崩す多くの事例がすぐに見つかります。まるで「自由に生きていいのですよ」と社会が微笑みかけているようです。しかし、規準を持たずに生きるのは、たいへんなことです。必死で、自分らしい生き方を探さなければなりません。下手をしたら、「自由からの逃走」が生じます。オウム真理教にはまっていた若者たちの心理は、これに近かったのではないのでしょうか。

こうした「自分探し」のプレッシャーから、若者を解放してやる必要があると思っています。そのために提案したいのが、半分「個」・半分「類」として生きてみたら、という

1) ただし、第1章「半分「個」・半分「類」として生きてみたら」だけは、この文章を最初に書きゼミで配布した日付です。WEBサイトは1999年3月5日に開設したので、この文庫のサイト上での公開もそれ以降になります。

ことです。確かに思索する動物である人間は、一個の個体として充実した生を送りたいという思いを抱くものです。しかし、それですべてではないはずで、人間も生物種のひとつであり、生命の歴史を紡いでいく存在でもあるのです。たとえ取り立てて語るべきこともないような人生であっても、親の子として生まれ、子の親となっただけでも、間違いなくその人間が存在した価値はあったと言えるはずで、個性的に生きられなくとも、自分らしい生き方が見つけられなくとも、自分が元気に生きているだけで喜んでくれ、もしも自分の存在が消えてしまったら、嘆き悲しむ親や子、そして仲間たちがいるのならば、生きているだけで価値があると言えるのではないのでしょうか。「個」として充実した生を生きられなければ自分の人生は無価値だなどと思わずに、「類」として自然に生きていくことにも価値があると考えるようにしたら、もっと楽に生きられると思います。もちろん、「類」としてだけ生きるべきだと言いたいわけではありません。半分「個」・半分「類」として生きるぐらいの気持ちでちょうどいいのではないかと考えています。

「類」として生きるという考え方を少し拡大するならば、他者を思いやるという生き方にもつながると思います。「個」としてのみ生きるのなら、自分だけが良ければそれでよいということにもなるかもしれませんが、「類」としても生きたいのなら、こんなことをしたら、自分のことを思いやってくれる人が悲しむのではないかとということも念頭に置かねばなりません。「援助交際」をする女子高生がよく語る「誰にも迷惑をかけているわけじゃない」という論理も、「個」として生きるという発想からは批判しきれないかもしれませんが、「類」としても生きて行くという発想から言えば、その事実を知ったら嘆き悲しむ親や未来の自分の子どものことを思いやって行動すべきだと批判することが可能です。もちろん、100%「類」として生きるべきだというわけではないので、場合によっては、嘆き悲しむ親がいても、「個」として輝きを求めるべき時もあるでしょう。しかし、「個」として生きることが強調されすぎる傾向のある現在の論調の中では、針を中央に戻すためには「類」として生きることをやや強調する必要があるように感じています。

第2章 欲望のままに生きていては…… (1999.8.8)

「必要は発明の母」という言葉があります。では、その「必要」の母は誰でしょうか？それは、たぶん「欲望」でしょう。「発明」が人類社会の進歩をもたらしたのだとすれば、結局は「欲望が進歩の母」だということになります。しかし、21世紀を目の前にした我々が持つ欲望は本当に人類社会に進歩をもたらすのかどうか不安に思えてなりません。

人は一人の異性を愛するだけで満足できるほどのかわいい欲望しか持っていないのでしょうか？この答えは間違いなく"No"だと思います。人間社会の歴史の中で、十分すぎるほどの財力を持った人間たちがやってきたことをみれば、この答えが"No"であることに異論は挟めないと思います。かつては、宗教や道徳がこの欲望に歯止めをかけてきましたが、今や宗教も道徳もかつての力を失っています。こんな欲望を解放したら、一夫一婦制家族は崩壊せざるをえません。

「一夫一婦制家族不要論」を唱える人もいます。確かに窮屈な制度です。だが、この制度に取って代わりうる一体どんな制度があるのでしょうか。欲望を一夫一婦制という窮屈な制度の下に押さえ込んで偽善的に生活していくことこそ、人類という種が生き延びていくために、生み出した知恵だったのではないかと思います。もちろん、「一夫一婦制」などに従わなくとも、新しい生命は生まれます。しかし、その命はどう育まれるのか？産んだ女性が一人で育てるのか？父親は不要なのか？偽善的であっても、愛する父親と母親を演じる人間が必要だと思います。「自分は愛されている」という思いが、人を育むのです。

家族制度の問題だけではありません。あれが欲しい、これがしたいという欲望がすべて肯定されたら、その欲望を達成する人の群で、社会はカオス状態にならざるをえません。「万人の万人に対する闘い」が現出することになります。不法な手段を使ってでも欲望を達成しようとする者たちばかりの世界。我慢と忍耐を知らない者たちが創り出す不気味な世界。21世紀を目前にし、今や新たな「十戒」の必要な時代がやってきているような気がして仕方ありません。

第3章 「小恋愛結婚」のすすめ（1999.9.21）

常々、私は「恋愛と結婚は別物」という主張をし続けてきました。特に「大恋愛結婚」は、互いに理性を失っている状態で結婚することになるから危ないぞと言いつけてきました。でも、映画やドラマではみんな「大恋愛」をしているので、みんな夢をみてしまうんですよ。もちろん、できるならば独身の間に——特に若いうちがおすすめです——「大恋愛」は経験してみた方がいいと思います。（自分がどこまでのほせ上がれるか知っておくのもいいことでしょう。）でも、そのまま結婚に持ち込まない方がいいと思います。「大恋愛」は必ずいつか冷めます。かつてあるドラマの中で武田鉄也が、「ほくは50年後も君を愛し続けます！」と言ってましたが、嘘です。そんなことはできません。もちろん、愛の形が、父と母という子育てパートナーとしての愛や、長年人生を共有した茶飲み友達の友情に近

いものにと変わってよければ、続くこともあるでしょう。しかし、男と女として引き合う「大恋愛」が永遠に続くなんてことはまずないと言って間違いないでしょう。

さてそれではどんな結婚をしたらいいのかということですが、「大恋愛結婚」が良くないなら当然その対極にある「見合い結婚」じゃないのと言われそうですが、必ずしもそうはなりません。確かに「見合い結婚」は、冷静に相手を観察しようとする点では、「大恋愛結婚」より危なくないかもしれませんが、一般的に短期間のつき合いで結婚に至ってしまいますので、いくら頑張ってもなかなか相手のことを十分には把握できるものではありません。「大恋愛結婚」のリスクも、ほとんどの場合、「大恋愛結婚」が短期間で結婚に至ってしまうところから来ていることを考えるなら、「見合い結婚」にも同じようなリスクが伴うことはわかっていただけるでしょう。つまり、一般的には全く違うと思われるこのふたつのタイプの結婚には、重要な共通点があるわけです。

「大恋愛結婚」もだめ、「見合い結婚」もだめとなったら、一体何がいいかと言えば、ここで私は「小恋愛結婚」というものをすすめたいと思います。「小恋愛結婚」って何ですかと首を傾げる人が多いでしょうね。私が造った造語です。（誰かがどこかで同じようなことを言っているかもしれませんが、私自身は知りません。もしも先に使っていた人がいたら、ごめんなさい。）「小恋愛」とは、自他共に認める特定の関係として1年以上つき合い——やはり1年は生活の中での重要なサイクルです。相手のことを理解するためには、春夏秋冬すべて過ごしてみないといけません——、相手に対する無用な感情の高ぶりは起きなくなり、にもかかわらずこれといったことをするわけでもないのに一緒にいるのが心地よいといった状態に入った男女関係と規定しておきたいと思います。（この規定が同性愛にも使えることは十分承知していますが……。）そうした「小恋愛」の状態で結婚に至れば、もっともリスクの少ない結婚ができるだろうと思います。ただ、この「小恋愛」の状態に入ると、「もうそろそろ結婚しようか」と決断するきっかけがなかなかつかめず、「小恋愛」関係が長期に渡るということがしばしば起きがちなのが、この「小恋愛」の難しいところです。

まあ、以上のようにいろいろ好き勝手なことを書きましたが、リスクのない人生なんてどうせないのだし、リスクを限りなくゼロにしたいなんて思っていたら、絶対結婚なんてできなくなります。なぜなら、現在の日本なら、30歳ぐらまでは親元にいる方が確実にリスクは小さいのですから。この文章を読んで、考えすぎて、さらに結婚から遠ざかる人が増えないように祈っています。

第4章 頭のギア・心のギア（2000.4.23）

比喩的な表現ですが、頭や心にもギアがあるような気がします。よくだらけていると、「気合いを入れなさい」とか「集中しなさい」と言われると思いますが、あれは、頭のギアを入れ替えなさいと言われていたようなものだと思います。私も、授業に行く前に気持ちを高めていくようにしていますが、あれも頭のギアを切り替えているようなものです。疲れた頭で運転をしているときに、高速道路に進入した途端、頭がはつきりしたことが何度もあります。高速道路ですから、集中していなければ命に関わります。無意識のうちに集中力を高めるように脳が指令を出したのでしょう。

「心のギア」はあえて言えば、「情と理」の切り替えでしょうか。と言っても、片方を立てたら片方が消えるというものではないと思いますが、「情」を熱くすべき時と、「理」を前面に押し出した方が良くときと使い分ける必要があるだろうと思います。議論は「理」でやりましょう。そして、「理」を出すときは、「頭のギア」を適当なレベルに切り替える必要があります。4段階くらいの調整が効くと思います。友達と話すときは第1段階、第2段階のギアで対応がつくでしょうが、フォーマルな場で話す時は、第3段階、第4段階くらいのギアで向かう必要があるでしょう。

「情」の方は、どうでしょうか。一見すると、「情」の方はみんな簡単にギアを入れているようですが、どうもバック・ギアばかり入りやすくなっているような気がします。「むかついた」「キレた」「頭に来た」「腹が立つ」、こんな言葉ばかりよく聞きます。「感動した」「嬉しかった」「楽しかった」「ありがたかった」、こういう素敵な言葉を、面と向かって相手——例えばご両親——にちゃんと言える人はどのくらいいるのでしょうか。「情」は何も「喜怒哀楽」だけではありません。「おもしろい」「興味深い」「不思議だ」「よくわからない」いろいろな感情があります。講義を聞いている時でも、みんなもっと「情」を顔に表してほしいものだと思います。表情が豊かな人の方が魅力的です。ゼミならなおさらです。感じたことを表情に出し、言葉に出してみたらいいんです。議論は「理」ですべきものですが、若い学生諸君なら、自信を持って「理」を立てられないときには、「情」だけで語りだしても許されるのです。（いい年をした大学教員が「情」でしかものを語れないと、馬鹿にされますが……。）

実を言えば、「頭のギア」も「心のギア」もすべて脳の支配を受けています。脳をどれだけ使えるかが人生を生きていく上でのポイントです。でも、大脳皮質ばかり使って妄想に走ったりせず、延髄も中脳も間脳も小脳もしっかり使って生きてほしいと思います。

第5章 良きフォロワーから失敗を恐れぬリーダーへ (2000. 6. 24)

巷で頻発する少年・少女たちの事件を聞きながら、「今時の若者は、どうしようもない」と嘆く人が多くいます。私もある面では、そうした意見に同調するところがありますが、現実には私の周りにはそんなに露骨な反社会的な人間ではありません。どちらかといえば、決められたことはきちんと守るし、反抗的ではないし、良い子が多いように思います。かつて大学生の意識調査をして、「新人類」と呼ばれる人たちの主要な価値観を「個同保楽主義」（個人主義的でありながら、同調性が高く、現状が大きく変わってほしくないという保守的志向を持ち、楽に楽しく生きていきたい）と名付け、世間で言われているほど、組織に適応できない人間ではなく、むしろ良きフォロワーになりうる存在だと指摘したことがあります（片桐新自『「新人類」たちの価値観——現代学生の社会意識——』『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号、121-150頁、1988年、参照）。この認識は大学生たちを見る限り、今も変える必要がないと思っています。たぶん、これは「集団主義」と呼ばれる日本の伝統的身の処し方と密接な関わりがあると思います。波風を立てないようにしながら、存在が埋没してしまわない程度に自分の存在に気づいてもらう。これが老若男女に受け入れられる日本人の生き方なのでしょう。（最近の事件²⁾は、良い子で来すぎた子が、自分の存在が埋没しているような意識に捕らわれ、引き起こした事件という説明が可能かもしれません。）

でも、ふと疑問が湧きます。全員がフォロワーを目指したら、誰が集団を、そしてこの社会を引っばっていくのでしょうか。きっとどこかにリーダーとか政治家とかになりたい人がいるだろうから、その人たちに任せておけばいいと思っているのでしょうか。そうかもしれませんね。本気で信頼もしていないけれど、代わりに自分がやろうなんて思いもしないから、結局「政治家なんてろくな奴はいない」とぶつぶつ言いながらも、全権委任をしまっているわけです。政治なんて遠すぎる実感の湧かない話をしていても、若者たちの心の琴線に触れることはできないでしょうから、話をもっと身近な集団に変えましょう。（本当は、大学生というのは、社会のエリートで、社会のことを考えなければならない存在のはずだったのですが……。）ゼミという小集団でも、リーダーが必要です。大多数の学生たちは、みんな何か楽しいこと、充実感をもてることをやりたいなと思っています。でも、自分が音頭をとって、みんなを引っばっていかうという気概のあるリーダーがなかなか現れません。自分が言い出してみんながついてこなかったらどうしようという不

2) 2000年5月に愛知県と佐賀県で連続して起こった高校3年生による殺人事件

安が先に立つのでしょうか。たった20人程度のゼミ仲間ですら率いるのは大変な仕事のようなのです。失敗したらどうしよう。浮き上がるのは嫌だ。ずうずうしい女性と思われたくない。動き出すのを止める理由などいくつも容易に浮かんでくるでしょう。でも、そうやってみんなが「誰かやってくれないかな」とフォロワー気分になってしまったら、何もおもしろいことは起きません。いわゆる「フリーライダー問題」（このケースでは、みんなを率いる「しんどさ」という費用を払わず、参加する「楽しみ」という利益だけを享受したい「ただのり者（フリーライダー）」ばかりになると、楽しいことなんか絶対に生じないというジレンマ問題と言い換えられます）が出現するわけです。

確かに社会や集団には良きフォロワーが必要です。しかし、失敗を恐れないリーダーもいないと集団は動きません。「水割り大学生」とか「マス（大衆）化した大学生」ということが言われて久しいですが、再度、大学生にエリートとしての自覚と、それにふさわしい行動を取りうる人間に育て上げる教育も必要ではないかと思っています。もちろん、50%近くもの人が大学に行く時代です。全員をエリートにすることはできません。しかし、私が見る限り、今は学生たちの方が自分で勝手に自分の可能性を低く見積もって、楽なフォロワーになる道を安易に選びすぎているように思えてなりません。自分を鍛えて、エリートとしての道——社会（自分が属する集団）のリーダーとしての道——を歩もうという気概を最初から捨て去っているような気がします。誰しも可能性は持っているのです。恐がらずにチャレンジしてほしいものです。なした時の充実感は、ただのフォロワーでは味わえないものです。社会のエリートとしての自覚を身につける第1歩は、ゼミや自分の所属している小集団を率いることから始めてみてください。

第6章 走り出す3回生たち（2000.10.28）

数年前に就職協定がなくなってから、就職活動がどんどん早まってきました。今では、3回生の秋には、当たり前のように就職活動が始まっています。人よりも少しでも早く動き出して、良いポジションを確保したいと思うのは、この「就職難」の時代においては、当然のことでしょう。でも、まだ大学生活を2年半しか経験していないのに、もう就職活動をしなければいけないなんて、なんだか可哀想な感じがします。

大学への入学目的を尋ねると、多くの学生たちが、「社会に出る前にもう少し考える時間がほしかったから」とか「自分に何が合っているかを見つけるため」といった理由を聞かせてくれます。大学生活わずか2年半で、もう十分ですか？十分なわけではないですね。

自分に何が合っているかがそんな簡単に見つからないですよ。でも、そんなことをいつまでも言っていられない。そんなことを言ったら、他の人に遅れを取ってしまう。潰れそうもない大企業にとにかく勤めたい。3回生の今の気持ちはそんなところでしょう。

大学は、高校までの勉強と違い、知識を得るおもしろさ、ものを考える楽しさを知ることができる場だと思うのですが、そうしたことを本格的に行いうるゼミが始まって半年で、もう卒業後の就職のために、学生たちの腰が落ち着かなくなってしまうというのは、教師としては非常にむなしさを感じます。こんな時代ですから、就職活動をするなどは言えませんが、あまり先のことばかり心配せずに、現在の大学生活を充実させようという気持ちだけは忘れずにいてほしいと思います。そうでないと、もったいないです。せっかくの学生時代なのです。大学時代、よく学び、よく遊んだ人の方が、卒業してからも、魅力的に生きています。

第7章 顔を上げて (2000.11.8)

夏には、たくさんいたジベタリアンも涼しくなってきたり随分減ってきました。特に、銀杏の実が落ちている道端には、さすがの若者も座りませんね。確かに臭いはちょっと強烈ですが、美しく色づいた銀杏の葉を見ると、秋だなあとしみじみ思います。私の好きな季節です。きれいな季節です。そんなことを思いながら歩いている私の前を、最近しばしば、下だけ見て通り過ぎる若者がいます。右手には携帯電話を持ち、せっせとメールを打っている人たちです。余計なお世話でしょうが、思わず「顔を上げて」と声をかけたくなくなってしまいます。「こんなきれいな季節なんだよ、見てごらん」って。メールをするのもいいでしょう。私もメールは嫌いではありません。でも、家で一人にいるときにやるならともかく、外に出ているときに、下を向いて携帯電話ばかり見つめていたら、すてきな景色も見逃します。

景色だけではないと思います。すてきな人が通り過ぎても気づきません。電車の中でも友達とのメールのやりとりで夢中になっている人をよく見かけますが、電車に乗っている人を観察していた方が私はおもしろいと思います。顔を上げて、視線をまっすぐにしていたら、下を向いてメールをしている人より、何十倍も豊かな情報が得られると思います。

授業中もそんなことを思うことがあります。結構下を向いている人がいるんですよね。最近、授業中にもメールをやっている人が少なくなっているらしいですから、そのせいでしょうか。「ゼミガイダンス」の時などは、みんなしっかりこちらを見ていますから、情報を

たくさん仕入れようと思うときは、やはり顔を上げるのでしょう。街中を歩いていても、授業中でも、背筋を伸ばして、顔を上げて、しっかり前を見ていたら、おもしろいことを見つけられる確率は、随分大きくなると思います。携帯電話という高度情報化社会の申し子のような存在が、実は取り入れる情報を非常に狭いものになっているというパラドックスが生じているような気がします。

第8章 戦後史を学ぼう！（2001.1.12）

ここ何年か前からあちこちで成人式が荒れたというニュースが流れていましたが、今年はある市が20歳の若者を告訴するという事件まで起こりました。大多数の20歳の若者は、そんなひどい行動を取っていたわけではないのは、重々承知していますが、今やもう「成人式」をやる意味はなくなったという気がしてなりません。その最大の理由は、20歳が今やまったく「大人」を意味しないからです。20歳になったから、大人としての自覚を持たなければいけないなんてことをまじめに考える若者がどれだけいるのでしょうか？あるワイドショーで成人式に集まった若者に「大人って、どういうことだと思いますか？」と尋ねていましたが、ほとんどの若者は気楽に「わかんない」と答えていました。もちろん、テレビ局の編集によって、まじめな回答が紹介されなかった可能性は多少ありますが、日頃その年齢の大学生をいつも観察している私から見ても、テレビで「わかんない」と答えていた若者は、決して特殊な若者たちではないと思えました。確かに「大人とは何か」などという問いに回答を出すことは容易ではありません。しかし、まじめに考えてみようともしない態度は、非常に気になります。なぜ、税金を使って成人式をやるかと言えば、こうしたフォーマルな式を通じて、「大人とは何か」、「成人とは何か」を考えてもらうためでしょう。たとえ、クラッカーを鳴らさなくても、汚いヤジを飛ばさなくても、まじめに「大人とは何か」を考えてみようともしない人たちばかりなら、貴重な税金を使って式など開く必要はないのです。

40年前なら、20歳の若者の大部分は、すでに親元を離れ、自分の給料で自分の生活をすべて切り盛りしていました。20歳どころか、18歳ぐらいでも、「自分は大人だ」という意識を持っていた人が少なくなかっただろうと思います。ところが、今や20歳をはるかに超えた人々でも、親元において、親の金で基本的な生活をし、自分が稼いだ金は、自分の遊びや趣味のためだけに使う「パラサイト・シングル」という「子供」、すなわち、親の脛を噛り続けることに何の疑問も感じていない若者がたくさんいます。よく、「フリーターを

しながら気楽に生きていきたい」という発言を聞きますが、自分一人ならそうやっても生きていけるかもしれませんが、家族はどうするのでしょうか。結婚はしないから問題はないと思っているのでしょうか。でも、だんだん年老いていく両親はどうするのでしょうか。親はしっかりお金をためているはずだとでも思って安心しているのでしょうか。育ててもらった恩は、いつか返すのでしょうか。自分一人が楽しく気楽に生きられればいいんだという考え方から脱却できたとき、「大人になった」と言えるのだらうと思います。それが、今は何歳で来るのでしょうか。あるいは、ずっと来ないのでしょうか。

過剰なほどの豊かさが、こうした「お気楽な若者」を作り出した根本原因であることは間違いないと思います。景気が悪い、悪いと言いますが、社会全体として見た場合、こんな若者を多数許容できるほど、日本は豊かなのです。しかし、豊かさは永遠に続くわけではありません。将来こうした若者が日本を背負うのです。20年後、30年後、いったい日本はどんな社会になっているのでしょうか。間違いなく、衰退しているでしょう。なぜなら、日本がどうして豊かになれたのかを知らず、豊かさを生み出した要因を継承しようとしていないからです。私は、正直言って今の日本の過剰な豊かさ——一般庶民が高級ブランド品を買い漁れるような豊かさ——が好きではないので、少し衰退するのはそれほど悪いことではないと思っていますが、それも程度によります。あまりに急速な衰退はその変化に誰もついていけず、社会は危険な状態になるでしょう。ゆっくりと静かに衰退して行かなければなりません。20～30年後なら、まだ今と比べてほんのわずかな衰退ぐらいで留まっていなければならないと思うのですが、今の若者が社会の中堅として支える時代になっているわけですから、想像すると、どう考えてもわずかな衰退で留まっているとは思えません。そうした悪しき予想を覆すために、若い人たちに、ぜひ日本の戦後史を学んでほしいと思っています。

日本がこんな過剰なほどの豊かさを享受するようになったのは、せいぜいこの20年くらいのことでしょう。昭和30年生まれのも、もちろん食べる物に事欠いたなどという経験はしていませんが、子供時代、青春時代を思い出すと、まだまだ日本が発展途上だったなあと思えることは、たくさんあります。子供時代の例を少しだけあげさせてもらえば、まだ冷蔵庫がなかったのも、氷屋さんに氷を買いに行ったこと、洗濯板と固形石鹼で洗濯していた母親の後姿、掃除機が初めて家に届いた時は、嬉しくて掃除をしている姿を写真に撮ったこと、カメラも昔は家になくて、持っている人が羨ましくて仕方がなかったこと、蠅がたくさんいたので、蠅叩きで叩きつぶし、袋に入れて持っていったら、紙風船と代えてくれたこと、どれひとつ今の20歳前後の人——いや、30歳代以下の人——にはない思い

出でしょう。「そんなの時代が違うから、しょうがないじゃないですか」と若い人は反論するかもしれません。でも、その若い人たちが享受している豊かさは、若い人たちが生み出したものではありません。今の豊かさを生み出したものは何なのか、考えてみてほしいと思います。日本はどうしてこんな豊かな国になれたのでしょうか。第2次世界大戦が終わった時、壊滅的な状態にあった日本が、それから55年あまりの年月で——実質的には30数年で——、こんなに豊かな国になったのです。資源も豊富ではなく、インフラも破壊され尽くした日本がこんなに早く立ち直り、豊かになれた原因は何だったのでしょうか。

ここで、私の答を書くのは簡単ですが、書かずにおきます。日本の戦後史を勉強して、その原因を自分なりに見つけてください。そして、何を今継承すべきなのかを考えてみてください。高校までの日本の学校教育の中では、時間がなくて戦後史はほとんど勉強していないと思いますが、実は今の若者に本当に必要なのは、戦後史の勉強なのではないかと強く思っています。ぜひ、戦後日本の来た道を知り、これから行くべき道をつかんでください。

第9章 子供は親のおもちゃじゃない！（2001.1.18）

少年たちの犯罪ほど大きく扱われていませんが、親が子供を殺す事件というのも最近とみに増えてきているように思います。ある意味では、こちらの方が少年犯罪より現代的で、恐ろしいのではないかと思います。子供が親に反抗的だったり、反社会的行為をしたりするのは、昔から大なり小なりあったことです。しかし、親が子を殺すというのは、飢饉の際の「間引き」や無理心中を別とすれば、そんなによくあったことではないと思います。それが、1980年前後からでしょうか、しばしば生じるようになってきました。村上龍が小説のモデルにしたことで有名になった、コインロッカーに乳児を置き去りにした事件が起こったのが、ちょうどその頃だったと記憶しています。それから、時々この種の事件は起きてきたのですが、昨年、奈良で看護婦をしている母親が十代の娘に保険金をかけて殺そうとした事件は衝撃的でした。夫や妻に保険金をかけて殺す事件や幼児を親が虐待して殺したという事件は、今やそれほど驚くべき事件ではなくなりつつありますが、十代——それも確か16歳くらいでした——の娘に保険金をかけて殺そうとしたなどという事件は、前代未聞だったのではないのでしょうか。母性愛が本能だなんて毛頭思いませんが、慈しみ育てていく過程で「愛」は生まれるはずですよ。十何年も育ててきて、あの母親に「愛」は育たなかったのでしょうか？

「愛」は、突然生まれるものではありません。育つものです。男と女の愛も、親子の愛も。いえ、すべからく愛は、と言ってもいいでしょう。「一目惚れ」なんて言葉がありますが、あれはまだ「愛」ではありません。単に、ちょっと気に入ったというだけにすぎません。「愛」になるには、時間が必要です。時間をかけて、大事に大事に育てていくものです。かけた時間だけ「愛」は深まるのです。ただ時間が経てばいいというわけではありません。大事に育てようという気持ちがなければ、「愛」は深まりません。男と女の愛は、またいずれ機会を改めて書きたいと思います。ここでは、親子の愛についてのみ書いておきたいと思います。

愛は時間をかけて育つものだという観点に立つと、「母性愛」と言われるものが一般的にどうやって生まれるかの説明は容易です。それは、10ヶ月強に及ぶ長い妊娠期間とつらい出産を経て形成されるのです。（この体験を共有できない父親は、生まれたばかりの子供に対して、母親のように愛情を感じられません。しかし、その後の育児に関われば、「父性愛」も育ちます。）こうして、ほとんどの母親は生まれたばかりの赤ん坊にすでに強い愛情を感じるができるわけです。でも、最近、このプロセスを経て生まれてきた子供に「愛」を感じられないという母親が、少なからず出てきています。この子を妊娠してしまったために、この子が生まれてしまったために、それ以前のように、遊べなくなった、自由な時間がなくなった、この子さえいなければ……。 「自己中心的」な発想が自明視されると、こういう親が出てくるのも不思議ではありません。確かに、自分で自分のケアができない子供は、親の時間を奪う存在です。でも、それはヒトとして、当然のこととして受け止めなければいけないことなのです。ヒトという種を存続させていくために、か弱い生命を守っていくことは、本来我々の遺伝子に組み込まれた最大の使命なのです。生命体としての根源的な欲求を、肥大化した脳が抑圧します。「私は個として輝きたい！」

他方で、「子供が欲しい」という人がいます。「結婚はしたくないけれど、子供だけは欲しい」という「シングル・マザー」志向の人すらいます。これは、ヒトとしての根源的な欲求に根ざした叫びなのでしょう。残念ながら、そうではないでしょう。私は、これも「自己中心的」な発想と近いところから出ていると思います。「プレステ2が欲しい」、「AIBOが欲しい」と言うのと、それほど大きな違いはないと思っています。子供はおもちゃではありません。おもちゃは飽きたら捨てることもあるでしょう。（こうした「使い捨て文化」も批判したいところですが……。）しかし、子供は捨てられません。絶対、捨ててはいけません。結婚もせずに——法的に結婚していなくても構いませんが、パートナーはもってほしいと思います——安易に子供だけ欲しいなんて言う人は、かわいい

おもちゃをほしがっている子供と変わらないと思います。

では、結婚して子供を持ち、その子供に愛情をたっぷり持っている人なら、何の問題もないかという、実はここでもまだ問題が起こる可能性があります。どんな愛の示し方をしていますか、という問いかけがなされなければならないのです。かわいい子供だから、その子の望むことは何でもさせてやろう、一切不自由は感じさせない、いたれりつくせりで、なんて思っている親がいたら、大馬鹿者です。子育ての基本は、いかにして子供を自立した社会の一員に育てるか、という一点にあると言っても過言ではないのです。子供にブランド物の服を買ってやったり、海外旅行に連れて行ったり、高級な料理を食べさせたりなんてことは、子供が育つ上で、「百害あって一利なし」です。そんなことをしたいなら、成長して自分で稼いだ金でやればいいことです。そんな贅沢に慣れ親しんだ子供は、贅沢ができない生活に耐えられないため、薄給の会社員などとは結婚できない人間に育ってしまいます。あるいは、家事・育児はもちろん、自分がかゆいなあと思っているところにも何も言わなくとも気づいてくれるような女性としか結婚できない、なんて男になってしまうのです。子供は親のおもちゃではありません。自立した社会成員に育て上げるのだという自覚をもって、子育てをしてほしいものです。（ちなみに、学校教育も目的は同じだと思います。）

第10章 ぼちぼち行くか、頑張るか（2001.1.21）

新聞にある社会学者が、こんなことを書いていました。「この社会は危機ではないし、将来は格別明るくもないが暗くはない。未来・危機・目標を言い立てる人には気をつけた方がよい。」日頃から、そんなことを言っている私は、さぞや気をつけてつき合わないといけない人間なのかなと自問しながら、読んでみました。全文を読むと、現状の政治批判の面が強く、必ずしも全面否定しなければならない文章ではありませんでしたが、やはり気になる箇所は、何カ所かありました。上の引用箇所もそうですし、「いま考えるに値することは、単なる人生訓としてでなく、そう無理せずぼちぼちやっていける社会を実現する道筋を考えることだ」とか、表題が「つよくなくてもやっていける」であることなどがそうです。（表題は、新聞社の方でつけたのかもしれませんが……。）

現代社会を危機と見るかどうかは意見の別れるところですし、このままではどんどん危機が深まると考えている私も、その原因が景気の悪さにあるなんて主張に、賛同するつもりは毛頭ありません。ただ、この文章を読んだ人が、「そうか、別に頑張らなくてもいい

んだ。ほちほちでいいんだ。強くならなくてもいいんだ。社会のことなんか考えなくてもいいんだ」という印象を持つのではないかと、ということが気にかかります。確かに、頑張りすぎてしんどくなっている人はいるでしょうから、そうした人たちが読めば、これは救いの文章になるでしょう。でも、まだ本気で頑張ったことのない人が、これを読んで「頑張らなくていいんだ。ほちほちでいいんだ」と思ったら、自分の能力を十分に発揮しないまま、歳を取ってしまうことになるのではないのでしょうか。現実社会には、前者より後者の方がはるかに多いはずです。こうした社会学者の常識をひねったような見方とそれを流布させるマスメディアは、こうした行為がどのような社会的影響を及ぼすのか、ちゃんと考えているのかなと疑問に思います。自分自身は頑張って一流大学を出て大学教師や大新聞の記者になった人たちが、その自分の人生を否定せずに、どうしたらこういう文章を書いたり、掲載したりできるのだらうと不思議に思います。

頑張って自分の人生を切り開いてきた人なら、とりあえず「頑張ってみようよ。努力してみようよ。そうしたら、自分のやりたいことがやれるようになる確率は高くなるよ」と言うべきではないのでしょうか。もちろん、頑張ったからと言って、いつでも希望は叶うわけではなく、あきらめなければいけない時もあるでしょう。でも、最初から頑張ってもみずにあきらめているより、ずっといいと思います。別の目標を立てるにしても、やるだけやったのだからと思えた方が、ふんざりがつくと思います。こんな「頑張り人生」はしんどそうと思うかもしれませんが、大丈夫です。人間って、そんなにずっと頑張れません。意識しないと、楽な方に流れるようにできています。いつのまにか、ちゃんと休息を取っています。かくいう私なども、スケジュールで縛られていないと、本当に怠け者だなと思います。せめて、意識的に行動するときは、「ほちほちでいいや」ではなく「頑張ろう」と意識したいものだといつも思っているのですが……。いずれにしろ、「自分で自分をほめてあげたい」と言ったマラソンの有森裕子さんではありませんが、誰も頑張っている自分の方が好きでいられるのではないのでしょうか。怠けたり、ほちほちやっている自分の方が、頑張っている自分より好きだっていう人はいるのでしょうか。

第11章 引きこもりと甘え (2001. 2. 17)

先日、「ニュース23」で「引きこもる若者」が紹介されていました。今は、こういう行動に対して多くのマスメディアは理解を示そうというポーズを取ります。この番組でもそうでした。でも、私はよくわかりません。何ヶ月も家から出ないで生きていけるのはなぜ

なのでしょうか？結局、一緒に住んでいる誰かが働き、買い物をし、食事を与えてくれるから生きていけるのではないのでしょうか？それって、家族に甘えているということではないのでしょうか？一人で生計を立て、一人で暮らしているなら、生活費を稼ぐためにも、食料を買うためにも、外に出なければいけないし、最低限ではあっても家族以外の他者とコミュニケーションを必ずとらなければいけないでしょう。徹底した引きこもりを続けられるとしたら、それは家族に対する甘え以外の何物でもないという気がしてなりません。結局、これも一種の「パラサイト」（寄生）状態なのではないのでしょうか。頑張ってきて疲れてしまったので、引きこもりになっていると言っていた人がいましたが、疲れたら休めばいいのであって、何も徹底して引きこもることはないでしょう。他者との関係がわずらわしく引きこもる人が、家族という他者には無制限に依存しているのはどう考えてもおかしなことのはずなのに、そういうことを一切指摘しないマスメディアの偽善性に疑問を感じます。家族が甘えさせなければ、社会に関与せずには生きられないのだということを、「引きこもる若者」も理解するはずです。

第12章 活己為公（2001. 4. 27）

「活己為公って何？」と思われたでしょうね。私の作った四字熟語です。もう前総理になってしまった森喜朗氏の座右の銘は「滅私奉公」で、これを朝日新聞はずいぶん叩いていました。悪しき戦前の思想を押しつけようとする不埒な総理大臣というところでしょう。でも、これに関しては、森前総理は「滅私奉公の気持ちで、私は総理大臣を務めている」と悪びれるところはなかったですね。私は「滅私奉公」なんて考え方は、嫌いです。でも、それは戦前に金科玉条のように唱えられた言葉だからではなく、「私」（個人）を滅ぼして奉る「公」なんてないと思っているからです。「公」が大切ではないということではありません。私は、「公」を「国家」や「天皇」ではなく、「社会」と考えています。社会学者である私が、「公」（社会）が大切ではないなんて思うはずはありません。ただ、「私」（個人）を滅ぼして、という発想は受け入れがたいのです。

確かに現代社会においては、健全な個人主義が利己主義にすり替えられ「公」（社会）を軽視する風潮が強まってきているという印象は私も持っています。「滅私奉公」なんて言葉を持ち出したくなる人が出てくるのもわからなくはないとも思います。でも「滅私奉公」は良い言葉ではないので、代わりに「公」と「私」がうまく調和できるようなものはないかなと考え作ったのが、この言葉です。「活己為公」と書いて、「かっこいこう」と読

みます。意味は、漢字を見ていればわかると思いますが、「己を活かして、公の為となる」ということです。つまり、自分の能力を精一杯活かして生きることによって、結果として「公」の為となっているというのが、一番望ましい個人と社会のあり方ではないかということです。自らの欲求充足水準を上げるために、勤勉・勤労の精神でコツコツと頑張ることによって、社会も豊かになってきた高度経済成長時代などは、まさに「活己為公」が自然と一般化していた時代と言えるかもしれません。

今は難しい時代です。もう日本社会は豊かになりすぎ、これ以上は豊かにならない方がいいというムードが漂う時代です。高度経済成長時代のように己の欲求充足水準を上げるために、ただコツコツと働いていれば、それが「公」のためにもなっているなんて単純に思えなくなっています。「『公』なんて知らないよ、自分が楽しければそれでいいじゃないか」と割り切れる人は、何も悩まずに済むのですが、そんな風に割り切れる人は意外に少ないのではないのでしょうか。自分の存在が、自分の行動が、自分以外の誰にも必要とされていないなんて思い始めたら、さぞかしつらいでしょう。だから、みんな友達をたくさん欲しがるのです。友達は自分を必要としてくれる人たちと考えられるからです。携帯電話が鳴るとちょっと嬉しく思えるのは、「今、誰かが私のことを必要としている」という実感を持てるからです。だから、「おはよう」「何してる？」の一言でも意味のあるやりとりということになるわけです。「暇だよ～」なんてメールを入れるだけでも、それで喜ぶ友達がいたら、友達関係という小さな「公」のためにはなっているのかもしれませんが、でも、この小さな「公」は大きな「公」につながるのでしょうか？

友達とともに自分が必要とされていると実感しやすいのが家族です。まだ子供の立場にある学生諸君は自分が家族で必要とされているかどうか実感できないかもしれませんが、とりあえずお母さんが毎日の食事作りを放棄することなく続けてくれていることで、自分たちはひもじい思いをせずに済んでいるなあとか、お父さんがコツコツ働いて給料を稼いでくれているから自分は大学に行けるんだな、と想像するくらいは容易なことでしょう。家族は新たな社会のメンバーを作り出す集団なので、この小さな「公」は、大きな「公」につながっていくと思います。(だから、とりあえず将来結婚して子供も作って、その子たちをしっかりと育てていくというのも、「公」のためになる立派な目標だと私は評価しています。)

しかし、家族や友達との関係性だけでは、自分の存在が十分に活かされていると思えないまじめな人は、家族や友達の範疇には入らないような誰かのために何かをしようとしみます。たとえば、ボランティア活動などがその典型です。ボランティアをして、「ありがとう」

と感謝されると、自分の存在が他人から必要とされているという感覚を味わえるのです。ただ、ボランティア活動はボランティアをする人にとって非日常空間で行われるものという位置づけなので、ボランティアをしているから自分の存在は「公」のためになっていると常に思えるわけではありません。より大事なのは、日常空間で何をするかでしょう。とは言っても、日常空間でも始終ボランティア的活動ばかりしているわけにもいきません。大多数の人は、日常空間では収入の得られる仕事をしなければなりません。結局行き着くところ、平凡でも自分の能力を精一杯使って一所懸命生きることでしょう。ただし、その際に他者のことも考えることが必要です。自分や自分にとって大切な人のことは誰でも考慮するでしょうが、もっと枠を広げて他の人のことも考慮すべきです。目に見えない他者のことまで考慮に入れるのは難しいとしても、目に見えている他者なら考慮に入れることはできるでしょう。家族じゃないから、友達じゃないから、知人じゃないから、なんて思わずに考慮に入れて下さい。そんな風に考えながら一人一人が自分の能力を精一杯使って生きていけば、その行動は巡り巡って「公」（社会）のためになっているし、まともな「公」（社会）ができあがると思います。

第13章 ちゃんと子供を注意して！（2001.4.27）

最近ファミレスで食事をしていて続けざまに何度か嫌な気分を味わいました。それは、騒ぐ子供を全く注意しない母親たちとの遭遇です。小さな子供は、社会のルールを知らないから、大きな声を出したり、走り回ったりすることがあります。これは仕方がないことです。しかし、それを母親たちが黙認している（というより全く気にしていない）のは、おかしいのではないかと思います。確かに、大声で怒鳴りつけたり、叩いたりする光景も見たくはありませんが、一言も注意しないのは絶対おかしいと思います。こういう場面できちんと注意することで子供たちは、「ああ、こういうところでは騒いじゃいけないんだ」ということを学習するのです。注意しなかったら、子供たちは社会のルールを学べないじゃないですか。

ここのところ、こういうことが続くので堪忍袋の緒が切れかかっています。今度そういう場面に出くわしたら、そういう母親たちに「ちゃんと子供を注意しなさい」と言ってしまうそうです。どんな反応が返ってくるでしょうか。「何よ！騒いでいるのはうちの子だけじゃないでしょ！」なんて、逆に怒鳴られそうな……。なんか恐いですね。話してわかる相手なら、忠告するのも意味があるのですが、そんな母親なら、他人に言われるまでも

なく最初からちゃんと子供のことを注意しているでしょうし……。となると、恐いですね。やっぱり注意するのは、やめといた方がいいかもしれませんね。

それにしても、ちゃんとした子育てができるほどに大人になっている——社会のルールを知っている——のかどうか疑問を持ちたくなる母親——もちろん父親もですが——が多すぎます。親になる準備ができていない若い人が「できちゃった結婚」なんかで親にならないでほしいと思います。子供を殺す親や虐待する親は問題外ですが、注意しない親、ペット化する親、パラサイトさせる親もイエローカードです。「理想は友達親子」なんて言っているのも変です。親子は親子です。もちろん、子供が成人し独立すれば、同じ大人同士として話もできるし、尊重もし合わなければいけないと思いますが、中学生や高校生の娘と母親が「うちは友達親子」なんて言っているのを聞くと、「何考えているんだろ、この母親は」と疑問に思います。親として、きちんと威厳をもって、子供に向かってほしいものです。

第14章 「愛」と「恋」(2001.5.18)

「恋愛」という言葉が広く普及しているので、誰もあまりこれを分けて考えないですが、実はこの2つは、かなり異なる感情だと思います。「愛」はいろいろな対象に向けられます。異性にも向けられるでしょうが、子どもにも、兄弟姉妹にも、友人にも向けられます。さらに人間だけではなく、動物にも植物にも、いや無機物にも向けられます。かわいいペット、大事に育ててきた観葉植物、こつこつ集めてきたコレクション、みんな愛情の対象になります。では、こういう「愛」の根源にある共通な感情とはどんなものなのでしょうか。私は、「愛」の基本は、慈しみや愛(いと)おしさ、つまり「かわいがる、大切にする」といった気持ちだと思います。そういう気持ちで満たされている時、人は精神的な心地よさを感じます。愛はゆったりした安らぎの感情なのです。

これに対して、「恋」の方はまったく違う感情です。人は一般的には無機物に恋はしませんし、植物にも動物にも恋をしません。さらに、友人や兄弟姉妹や子どもにも普通は恋はしません。基本的に、恋は異性のみに向かうものです。(同性愛の人は、同性に向かうのでしょうか。)そこには、どんな感情があるかという、ゆったりした安らぎの感情ではなく、どきどきする感情です。つまり、「恋」の方は、興奮につながるような刺激的な感情なのです。人は、ゆったりした安らぎの感情も好みますが、実はこの「どきどき感」もまた好きなのです。ゆったりした安らぎの感情で満たされた生活をしている人はとても

幸せな人なのですが、しばしば「平凡でつまらない。何か刺激がほしい」とつぶやくのです。恋をしたがるのも、スリルが味わえるテーマパークのアトラクションを体験したいと思うのも、実は根っこの部分では同じようにこうした「どきどき感」を求めているからなのではないかと思えます。

この「どきどき感」は興奮という急激な生理的変化を伴いますが、こうした急激な生理的変化を起こしやすいのは、肉体的生理的柔軟性をもった若い人です。年をとった人は、何か刺激の強いことに出くわすと「心臓が悪い」という言い方をよくしますが、実際肉体的生理的柔軟性が落ちている年輩者にとって、急激な生理的変化を伴う興奮は危険です。こうした生理的な違いによって、「恋」と「スリル」は若者が主として楽しむものになっているわけです。もちろん、若いけれど、「どきどき感」より「安らぎ感」が好きだという人はたくさんいると思います。これは当然です。いくら若い人でも始終どきどきしていたら疲れます。刺激はたまにあればよいのです。しかし、もしもそのたまの刺激も要らないという人は、「恋」には不向きなタイプでしょう。でも、「愛」には向いているかもしれません。たぶんそういう人は「恋人」としてはおもしろみがないでしょうが、よい夫や妻、あるいはよい父親や母親になれる可能性は十分持っています。

「恋」は若いときにたっぷり味わって、年をとったら穏やかな「愛」を、というのが、人の生理的変化に合った恋愛の変遷でしょう。つまり、いわゆる「恋愛」には「どきどき感」を求め、結婚してからは穏やかな「愛」を育んでいくという人生です。でも、実際には「恋」で得られる「どきどき感」をいつまでも欲する人も少なくないようです。まあ、結婚もしておらず、肉体的生理的柔軟性も落ちていない人なら、「恋」を求め続けてもあまり問題はないでしょうが、結婚している人たちが、「恋」を求め続けるとなると、話は違います。「どきどき感」というものは新鮮なものに対してしか生じません。「スリル」を味わうアトラクションでも、何回も経験したら、全くどきどきしなくなるように、「恋」は常に新鮮な相手を対象にしないとできないのです。だから、最初どきどきする相手だった異性（恋人）でも結婚して月日が経てば、どきどきしなくなります。つまり、配偶者はどきどきする「恋」の対象ではなくなります。つまり、あくまでも「恋」を求める人は、配偶者以外の異性に「恋」をせざるをえないのです。

こうした「恋」は、しばしば「浮気」と呼ばれます。短期的であっても「恋」をしている限り、それは「本気」のはずですが、なぜか「浮気」と呼ぶのです。それは、配偶者や子供に対する思い（愛）と「浮気」相手に対する思い（恋）は別種類のものだという社会的認識があるからです。実際、家庭を壊す気のない浮気者たちが、あまり心を痛めずに「浮

気」という「恋」ができるのは、この「恋」と「愛」の感情の違いを無意識のうちに利用して自己正当化を図っているからだと思います。しかし、配偶者が自分以外の異性に「どきどき感」を感じていると知ってしまえば、いくら浮気している方が、「君のことを愛おしいと思っている」「大切だと思っている」と言ったとしても、それは多くの場合、相手に受け入れられません。そして非難されれば、浮気している方も、もう相手に対して「安らぎの感情」(愛)も持てなくなります。「愛」と「恋」は別の感情ですが、対象が同じ異性である限り、互いに無関係というわけにはいかないのです。特に男女の「愛」は最初は必ず「恋」の時期を持っていますから、新たな「恋」が新たな「愛」へと転換しないという保障はどこにもないのです。こうした問題がたくさん起こりすぎないように、人間は歳とともに「どきどき感」という生理的興奮をしにくく——「恋」に向かなく——なっているのでしょう。

第15章 3分の1の幸せ (2001. 7. 20)

心理学の専門家ではないので、何の学問的裏付けもないのですが、自分自身のこれまでの経験からすると、3分の1ぐらいの確率でいいことがあれば、結構楽しくやっつけていけるような気がしています。3日に1日ぐらい今日はいい日だなと思えたら、結構幸せですし、3人と知り合いになった時に、そのうちの1人とかなり気が合えば、十分ラッキーだし、3回デートして1回がとてもしゃべれば満足してもいいのではないのでしょうか。でも一般的に、人は2分の1ぐらいの確率でうまく行くことを無意識に期待しているように思います。「今日はだめだったから、明日は必ず」とか「今回は負けたから、次は勝つ」といったぐあいに。世の中には二者択一のように見えるものが多いので、半分ぐらいは成功することを自然と求めてしまうのでしょうか。でも、日々の生活の中では、実際には二者択一でないことの方がはるかに多いのですから、2分の1もうまく行くとしたら、うまく行きすぎでしょう。まあでも、こんなことを書いている私自身がしばしば半分どころか、95%ぐらいの成功を求めて得られず(そんな確率で求めたって得られないのは当たり前なのですが)、落ち込んでいるのですから、いかに頭で理解していることと気持ちや行動を合致させるのは難しいかということですね。しかし、自分のことは棚に上げて言えば、この「3分の1の幸せ」で満足できるようになれば、絶対楽になれると思います。

第16章 ドタキャンのコスト（2001.8.10）

土壇場になってからキャンセルすることを「ドタキャン」と言いますが、最近この「ドタキャン」を軽くする若い人が少なからずおり結構気になっています。前日や当日になって、急に行けなくなったと言い出すのは、大変迷惑な行為だということをもっとちゃんと自覚してほしいと思います。フォーマルな旅行会社のツアーであれば、払い込んだ額の50～100%のキャンセル料を取られるところですが、インフォーマルなイベントや人間関係においては、そういう目に見える形でのサンクションはありません。しかし、実は「ドタキャン」のコストは、インフォーマルな関係においても非常に大きなものです。いや、明確な責任の取り方をしていない分だけ、フォーマルなキャンセル料を支払った場合より、より後の余波は大きいと言ってもいいかもしれません。「ドタキャン」を1度すれば、「えっ、そんな人だったの?」と懐疑の目で見られ、2度、3度とするようであれば、もう誰も信用しなくなります。人間社会を生きていく上で、「信用」というのはもっとも大事な要素のひとつです。それを失ったら、ろくな人生を歩めません。一度行くと約束したら、余程のことがない限り行くべきです。親族に不幸があったとか、全く動くことができないというなら、仕方ありませんが、「体がしんどい、痛い」なんて、「ドタキャン」をする正当な理由にはなりません。こういった甘ったれた「ドタキャン」は圧倒的に女性に多いですね。「ごめ～ん」ですべて済むと思っているのでしょうか。そんな無責任な姿勢では仕事はもちろん、家庭だってうまくやっていけません。

どうしてこんないい加減な風潮が広まっているのでしょうか。小さいときから責任感が身に付くように親がきちんと教育していないということも一因でしょうが、携帯電話の普及もこれに加担しているように思います。携帯電話が普及することによって、いつでもどこでも連絡が取れるので、正確な待ち合わせ場所と時間を決めない、あるいは決めていても気楽に遅れていく、そして果ては「ドタキャン」をするということが行われやすくなったのではないかと思います。連絡さえつけばそれでいいのでしょうか。「ごめ～ん」と一言言えばそれですむのでしょうか。その集まりを成功させるために準備してきた人に対する申し訳なさで心は痛まないのでしょうか。ポケベルや携帯電話などというものがなかった頃は、みんなもっと約束を大事にしていました。時間と場所を決め、行くと言った限りは時間に遅れないように必ず行く、これは常識でした。携帯電話は確かに便利です。しかし、その便利さが人間をだめにするのがないように、自らをコントロールしてほしいものだと思います。

第17章 賢さとは？ (2002.1.19)

前々から思っていたのですが、「賢さ」というのは、受験勉強でよい点が取れるということとは、別物だと思います。受験勉強なんて、はっきり言って記憶力さえ良ければ、なんとでもなります。でも、記憶力がよいだけでは「賢い」とは言えません。確かに、記憶力が非常に悪いと同じ失敗を何回も繰り返すことになり進歩が遅くなりますので、賢いとは言いがたいと思いますが、でも抜群によくなくても賢いと思える人はたくさんいます。誰だって仲のよい友だちの名前や顔は間違いなく記憶しているし、忘れることもまずないでしょう。人間には普通に生活していくのに十分な程度の記憶力は備わっています。では、何が賢いと言える決め手になるのでしょうか。ちょっと前に、IQ（知能指数）に対してEQ（感情の知能指数）というものが提起され、IQよりもEQが高いことが人間関係をうまくやるためには必要だと主張されましたが、これなどもある種の「賢さ指標」と言えると思います。状況判断力（洞察力）、感情統制力、決断力、忍耐力、共感力等々を指数化しようとしたもので、それなりに使いでのある指標ではないかと思っています。インターネットで「EQテスト」というのを見つけたので、私もやってみたところ、大学生の平均より私がかかなり高かったのは、「決断力」、「状況適応力」、「自己洞察力」などで、平均よりもやや低かったのが、「愛他心」、「楽観性」、「感情コントロール」などでした。まあそんなところかなと思いつつ、私はEQは結構高いのではと思っていたので、なんとなくこの指標にも納得がいかないなあという気がしたのも事実です。

私が個人的に「賢さ」をはかる規準として重視しているものは、バランス感覚です。例えば、私がEQテストで大学生の平均より低かった「愛他心」をはかる質問として、「何事も相手の立場に立って考えるようにしている」という質問や「たとえ、どんな状況でも、相手を傷つけることはしたくない」という質問があり、これに「非常にあてはまる」と答えるとポイントが上がるのですが、そんな回答は私にはできませんし、またそうすることがいいことだとも思えません。相手の立場に立って考えることは必要ですし、むやみに人は傷つけるべきではありませんが、そんなことばかり気にしていたら、相手に対する「イエスマン」になってしまい、決してよい人間関係が形成されるとは思えません。状況によっては、相手に対して辛口と思われるような発言でもできなければいけないと思います。いつでも自我を通すのがよいわけではないように、いつでも相手のことばかり考えているのがよいわけではありません。感情もいつも抑えているのがよいわけではなく、時として感情を表してみるのも大事でしょう。喜びや嬉しさは多くの場合表出した方がよいですが、

同じ状況でがっかりしている人がいる場合は、抑える必要もあるでしょう。怒りや悲しみは多くの場合抑制した方がよい感情ですが、時には明確に示すことによって自分の考え方や気持ちを周りにきちんと伝えることも可能になります。要するに、状況を見極めたバランス感覚が必要なのです。これは、他者との関係においてのみ必要なものではなく、自分自身の生き方をコントロールするためにも必要でしょう。仕事と遊びのバランス、たくさん抱えている役割——たとえば、私なら父親役割、教師役割、研究者役割、行政職役割、etc.——間でのバランスを取る必要があります。このバランス感覚がなければ、自分の生活すらうまくコントロールできなくなります。あることには熱心だが他のことは全然だめという人は、私はあまり賢い人だと思いません。私が敬愛しつき合っていきたいと思う人たちは、このバランス感覚の取れた賢い人たちです。

第18章 人生の先達の役割（2002. 4. 11）

最近よく思うのですが、人生をより多く生きている人のもっとも重要な役割は、言葉で偉そうなことを言ったりすることではなく、その人自身が楽しそうに生き生きと生きている姿を見せることではないでしょうか。たとえば、私が人生は楽しいという雰囲気を出して生きていたら、私の周りにいる若い人たちは、あんな楽しそうな46歳もありうるなら、年を取るのも悪くないと思えるのではないのでしょうか。私自身も、60歳代、70歳代で楽しそうに生きている人を見ると、あんな70歳ならなりたいたいと思います。言葉で伝えようとしてもなかなか伝わらないことが、人生を楽しそうに生きている先達の姿を見るだけで、容易に伝わってきます。要するに、「身をもって示す」ということなのですが、しんどいことを率先してやるということではなく、楽しく生きること、これが何よりも大切だと思います。もちろん、その楽しさを得るために、他人に迷惑をかけるようでは困りますが。

結婚に対する志向性なども、自分の両親がどういう姿を見せてくれたかということから大きな影響を受けると思います。両親の夫婦仲が良く、楽しそうな姿を見せてくれたら、子どもたちも自然と自分もいつかはあんな風に幸せな夫婦になりたいと思う確率は高いはずで、他方で、夫婦仲が悪かったり、両親の片方が一方的に耐えることによってなんと夫婦関係が保たれているような姿ばかり見てきた子どもたちは、夫婦関係を構築することに躊躇するようになる確率が高いだろうと思います。もちろん、結婚に対する志向性に影響を与える要因は他にもいろいろありますので、両親の姿だけでは決まりませ

んが、重要な要因のひとつであることは間違いないと思います。

少年犯罪が頻発しているときに、しばしば「子どもたちは、大人たちのまねをしているだけだ」という主張がされることがありますが、これもある意味ではその通りなのかもしれません。人生の先達は、すべての面で後から来る者たちのモデルになっているのです。悪いモデルではなく、よいモデルにならないといけないということを、みんなが少し意識したら、社会ももう少しうまく機能しそうです。少なくとも、女子高生たちに「高校を卒業したら、もう後は下り坂」といった認識を持たれるような大人ばかりの社会では困ります。ティーンエイジャーたちに、あんな20代、30代ならなりたいたいと思わせてくれるような人たちがたくさんいてほしいと思います。そう思ってもらうためには、しんどそうに生きている姿ではなく、楽しそうに生きている姿を示すのが一番です。

第19章 恋をしようよ、男の子！（2002.7.10）

私は大学教師になって今年でちょうど20年目なのですが、この間一貫して「女子学生は元気になってきたけれど、男子学生はおとなしくなってきた」と言われ続けてきました。確かに、私自身の観察でも、そうした傾向は確認できるように思います。もちろん、一方では世慣れた「遊び人」（最近では「ギャル男」というのでしょうか？）を演じる男子学生もいますが、たぶん少数派でしょう。キャンパスで見かける男子学生たちはそんなに「遊び人」には見えません。ましてや、私の講義を熱心に聞いてくれているような男子学生には、そういうタイプはほとんどいないと思っています。別にまじめに勉強している人がみんなおとなしいタイプだと言いたいわけではありませんが、みんな人生をちゃんと楽しんでいるかなと時々心配になります。人生の楽しみ方はいろいろあると思いますが、若いときはやっぱり「恋」をしていないと、楽しくならないと思います。恋をしていますか、男の子たち？（「男の子」なんていい方は、かつての大学生にはほとんど使わなかったのですが、最近では学生たち自身も自分たちで使っていたりするので、こちらもだんだん違和感がなくなってきました。）

もちろん、恋をしていた方が楽しいのは、男も女も同じでしょうが、なんか最近の状況は、女の子に比べて男の子が何倍も恋をしにくい環境になってきているような気がしてならず、思わず「頑張れ、男の子！」と言いたくなるのです。ストーカーやセクハラといった言葉が簡単に投げつけられ、さらには「女性専用車両」まで現れる時代です。町に出る時は、男の子たちは、自らを去勢しておかないと危険です。「色っばいなあ」なんて口に

出していけないのはもちろん、3秒以上見つめてもいけません。即刻「セクハラ！」というイエローカードが出ます。恋をしても、その相手の女性についていろいろなことを知りたいなんて思っではいけませんし、告白してだめだった場合は、即座にその人のことを忘れなければいけません。万一、忘れきれず再チャレンジなんかしたら、「ストーカー」でレッドカードです。電車で女性と一緒に乗り合わせた男たちは、すべからく可能性としての「痴漢予備軍」というレッテルを貼られています。

こんな状況なので、まじめな（というか普通の）男の子たちが恋をしにくいのは、当然です。私にはこの状況はよい状態だと思えません。（たぶん、男の子だけでなく、女の子にとっても。）「健全な肉体に健全な精神が宿る」という格言がありますが、「健全な精神」の中には、「異性に対する興味関心」も当然入るはずで、色っぽい格好をしている女性に対して「色っぽいなあ」と思うのは自然な感情ですし、つい見つめてしまうのも自然な行動だと思います。本当に好きになったら、その人のことを知りたいと思うのも、一度くらいの挫折であきらめきれないのも、自然な感情だと思います。最近、レア・ケースが大々的に取り上げられて何が自然な状態かわかりにくくなっていますが、人間は雌雄別体の生物なので、男が女に惹かれ、女が男に惹かれるのが、自然な状態なのです。恋をすることに臆病になることはありません。「遊び人」や「ギャル男」だけが恋を楽しむのではなく、普通の男の子がもっと自然に恋をし、それを伝えられたらいいのと思います。

ただし、男の子が恋をしにくくなっているのは、上で述べたような男女をめぐる社会環境の変化だけが原因ではないでしょう。もうひとつ指摘しておかなければならないのは、男の子自身が傷つきやすくなっているということです。恋はいつでも実るとは限りません。むしろ、失敗することの方が多いでしょう。その時に、その失敗をしっかり受け止める忍耐力を持っていない人は、恋をする資格はありません。逆恨みしたり、落ち込みすぎたりするようではだめです。（ある程度の落ち込みは当然だと思いますが……。）「遊び人」や「ギャル男」がたくさん恋（恋愛遊び）をできるのは、ある意味で、こうした過度な繊細さ（傷つきやすさ）を彼らが乗り越えているからでしょう。「遊び人」や「ギャル男」になるのではなく、普通の男の子にぜひ恋をしてほしいと思います。若い時に思いっきり恋をしておかないと、人生後悔しますよ。「恋」は若者だけのものではありませんが、若いときの方が恋をしやすいのは確かだと思います。みんな、いい恋をしてください。特に、男の子！

おわりに

もともとは一般に公開しているWEBサイトに公開した文章ですが、やはり大学教員という職業柄、どうしても学生たちが読んでくれることを意識した文章が多くなっています。これから進むべき道を探して社会に出て行こうとする若い人たちに、社会学の見方は非常に役に立つと思っています。しかし、決して若い学生たちだけでなく、結婚してからも、親となっても、役に立つと確信しています。人の一生は終わることのない役割取得過程です。多く人は、職業人としての役割を学び、夫役割・妻役割を学び、父役割・母役割を学び、そしていずれは祖父役割・祖母役割を学んでいくわけです。結婚しない人でも、中年に期待される役割、老年に期待される役割などを適切に学んで行かなければ、社会は生きにくいものです。そして、その役割は時代とともに変化していくものです。今は、どういう時代で、社会は自分のような社会的位置にある者に、何を期待しているのかを適切に知ることによって、人生は確実に生きやすくなるはずです。

—2008.7.19受講—